

# Nara Women's University

【内容の要旨及び審査の結果の要旨】 明末文言小説  
研究 -宋懋澄『九籥集』の「稗」を中心に-

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2010-01-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤,徳子, 松尾,良樹, 井上,裕正, 弦巻,克二, 野村,鮎子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10935/1206">http://hdl.handle.net/10935/1206</a>

氏名(本籍)	伊藤徳子 (秋田県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博課第222号
学位授与年月日	平成16年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間文化研究科
論文題目	明末文言小説研究 — 宋懋澄『九籥集』の「稗」を中心に —
論文審査委員	(委員長) 教授 松尾良樹 教授 井上裕正 教授 弦巻克二 助教授 野村鮎子

## 論文内容の要旨

本論文では、明末萬暦年間の宋懋澄の『九籥集』を題材として、明末文言小説の価値の再検討を行った。

従来の明代文学、殊に小説研究の重点は文言小説にではなく、白話小説に置かれており、明代文言小説は、白話小説との関係という点から取り上げられるにすぎなかった。しかし、白話小説の出典は多くは文言資料或いは文言小説によっており、大量の白話小説の出現は、文言小説の蓄積の上に成り立っているともいえる。両者の関係は、単純に一方向的な影響関係とはいえ、双方向の影響関係であった可能性があることを考証した。

第一章及び第二章では、宋懋澄自身のおかれていた環境、および『九籥集』という書物そのものについての考察を行った。宋懋澄は、生活に不自由のない、裕福な家に生まれた。彼の環境は当時の士大夫の一典型である。また、その交友関係は、社交界の名士、文壇の名士に及び、彼が科挙のために北京や南京に頻繁に出かけたこともあって、かなりの広範囲に及ぶ。

『九籥集』は宋懋澄の個人文集であるが、その中に設けられた「稗」という項目は他の文集にはみられない特殊なものであった。『九籥集』「稗」には雑多な文が混然と収められているが、中心となるのは、文言小説としての体裁を持った作品である。「稗」が選ばれた理由は、「傳」や「記」という文言のジャンルの規範に縛られず、自由な立場で文章を書くためであったことを論じた。また、これらの「稗」は、宋懋澄の全くの創作ではなく、彼の幅広い交際の中から取材され、文章化されていったことを論証した。

第三章においては、「稗」の具体的内容について検討を加えた。「稗」に収められてはいるが、単なる備忘録とも言うべき文もあり、すべてを文言小説としては認めることはできないが、本章で取りあげ詳細に分析検討した「吳中孝子」「珠衫」「俠客」「耿三郎」「劉東山」などの諸篇は伏線を設けるなどの複雑な構造を持ち、細かな人間の心理描写を行い文言小説として豊かな内実を有する価値高いものであることを論じ、従来の如く、文言小説は白話小説の単なる素材でしかないとする見方は、これらの諸篇には全くあてはまらないことを指摘した。

第四章では、「稗」の中の文言小説の特徴を持つ三篇について、それらを翻案した白話小説と比較検討した。両者の差異は、大まかにいえば三つある。一つは、白話小説は文言小説よりも描写が具体化詳細化している。二つ目は、白話小説は文言小説の本編とは別の要素を取り入れ話のつじつま合わせを行い、それによって主題の転換を行っているということである。三つ目は、当然文体の違いはあるが、物語の構造・構成・人物設定という点では、文言小説と白話小説では大きな違いは認められない。このように差違と変らない点を比較考証することにより文言小説は小説としてすでに高い完成度を備えていたことを論じた。宋懋澄の「稗」がこのように小説としての完成度を高めていった原因として、当時の文人の価値観の変化や、宋懋澄自身のおかれた環境との関係も考えられるが、最大の要因として白話小説が社会に浸透していたことが挙げられる。明末のこの時期、文言小説と白話小説は互いに影響を与え合いながら変化を続けていたのである。

第五章では、宋懋澄の「稗」がどのように受容されたかについて検討した。宋懋澄の「稗」は同時代の文人の文集に採録されただけでなく、清初の文芸作品にまで影響をあたえたことを資料により確認した。宋懋澄の「稗」は多くの同時代及びその後の文人達に愛好され、受容されていったことを示した。

以上、本論文では宋懋澄の「稗」の小説史上での価値を五章に分けて論じてきた。宋懋澄の「稗」は、時には『剪燈新話』のような駢文を用い、一方で文言小説として高い完成度を誇る『聊齋志異』にも劣らない優れた作品を収める。明初から清初にいたるまで特筆すべき文言小説は無いといわれるが、宋懋澄の「稗」こそはその時期の空白を埋める重要な作品ということができ、宋懋澄の「稗」は文言小説史、中国小説史の上で重要な価値を有すること、また、白話小説と文言小説の相互影響を明確に確認できる資料としても高い価値を有することを論じた。

## 論文審査の結果の要旨

中国文学の長い歴史の中で、小説は一貫して正当な評価の対象とされることはなかった。小説を文学の一部と認め、研究評価が行われるようになったのは、20世紀になってからと言っても過言ではない。

『三国志演義』『西遊記』『水滸伝』『金瓶梅』の四大小説が成立したのが明代であったことから、小説が評価されると共に、小説研究は明代小説研究と同義語となった。これら四大小説はまた白話小説の代表でもある。白話もまた、正規の書記言語が文言とされてきた中国では、長期にわたり価値を認められなかった。20世紀における価値転換は、文言→白話、小説は無価値→価値あるもの、という二面での価値の転換であった。ここから小説史研究の中心が明代白話小説研究に向うという趨勢が生れ、その流れは今日なお主流である。

本論文はこのような時流に抗して、明末の一文人の文集をとりあげ、「稗」という小説史の初期に用いられた名称を冠したジャンルに分類される幾つかの作品をとりあげ、精読し、緻密な分析を通して、これらが文言小説として高い完成度を有していたことを論証する。

明代の文言資料、文言小説は白話小説に素材を提供したにすぎない、価値なきものだ、という従来の考え方に異を唱え、明末文言小説に白話小説に劣らぬ価値を認めるべきことを論じる。文言小説→白話小説という一方向の影響関係ではなく、白話小説→文言小説への影響もあり、両者は互いに影響しあいながら発展したことを論証する。この三つの論証は、従来の研究の欠如に踏み込んだものとして評価しうる。

第一章では、宋懋澄の文集『九籥集』の構成およびその版本について、書誌学的に考証する。本書は一部分が中国で活字出版されているが、その全貌はよく知られていなかった。日本内閣文庫本・台湾国家図書館本・上海辞書出版社蔵本の三本について実地に調査を行い、新たに多くの知見をもたらしており、今後の研究を裨益する所大である。

第二章では、作者宋懋澄の生い立ち、宋懋澄の一族・その交友関係・同時代人による評価について述べるが、中国では官僚として功成り、正史に伝記の残る人以外について、その生涯をたどるのは容易ではなく、官途につくことのなかった宋懋澄も同じである。従って本章の記述は、『九籥集』の全貌の調査という第一章を俟って始めて可能となった部分が少なくない。学会に知られていなかった確実な資料を利用し得た最たる者は息子の宋徵興の文集『林屋文稿』であり、稀覯本で誰も利用しなかった本書を、上海図書館蔵本を実地に調査し利用したことで、諸説あった宋懋澄の生卒年を息子の書いた父の伝記「先考府君幼清行實」により確定したことをその一例として評価することができる。

第三章では、『九籥集』のうちの「稗」を取り上げ、その代表的な作品を精緻に分析している。「呉中孝子」「珠衫」「侠客」「耿三郎」「劉東山」等の諸篇は従来問題とされることの殆んどなかった作品群であるが、各作品を丁寧に追いかけて、細かに描写を分析し、これらの作品が文言小説として充実した内容と、しっかりした構造を有していることを論じている。ただし、「稗」の全作品に目を配ったことから、内容の雑然さに拘泥しすぎた面があり、宋懋澄にとっての「稗」の意味の解明に不十分さを残した点があるのは、今後の課題であろう。

第四章では、「劉東山」「珠衫」「負情儂傳」とこれら三篇を素材とした白話小説を比較検討し、白話小説では具体化・詳細化が行われ、物語を増幅し、作品に娯楽性を生みだしたが、文言小説の本来の物語の枠組みや登場人物の設定などの根本は変更されていず、素材となった文言小説自体が物語として高い完成度を有したことを論証している。

第五章では、宋懋澄の「稗」が同時代あるいは後世にどのように受容されたかを、『情種』『情史』『巨史』などの資料により精査しているが、これらの資料も今迄余り利用されなかった資料であり、多くの新しい知見がもたらされている。

全体的に見て本論文は、明末の文言小説に大きな文学史的価値を見出したことを高く評価し得る。従来全貌の知られなかった資料、殆んど用いられなかった資料により多くの問題を解明したことも評価に値する。これらの資料は多くの難解な部分を含んでおり、今後の研究に俟つべき点も少ないが、研究資料としての価値を顕賞したことは大いに意義が認められる。

本論文は奈良女子大学博士（文学）の学位を授与するに、十分な内容を備えていると判断される。